九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

醜形懸念の評価方法の確立および青年期における醜形懸念の特徴

田中, 勝則

https://hdl.handle.net/2324/1544040

出版情報：九州大学, 2015, 博士（心理学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名　：田中 勝則

論 文 名　：醜形懸念の評価方法の確立および青年期における醜形懸念の特徴

区　　分　：乙

論 文 内 容 の 要 旨

ボディイメージ障害の一つとして，自己の容姿を醜いのではないかと思い悩み，その結果，社会的，対人的，職業的損失を被ってしまう醜形恐怖症 (Body Dysmorphic Disorder; BDD) と呼ばれる臨床像が存在する。近年，こうした症状は一般の健康な群でも認められることが指摘されている。このように，非臨床群に認められる醜形恐怖症の症状は醜形懸念と呼ばれる。海外では醜形懸念を取り扱った先行研究が見られ，醜形恐怖症理解のための知見が積み重ねられている。しかし，我が国においては醜形懸念を定量的に評価するための方法が確立しておらず，その実態に関する知見は皆無と言っても過言ではない。そこで，本研究ではこの醜形懸念に着目し，研究を行った。

本論文は大きく先行研究のレビュー，醜形懸念の評価法の確立，醜形懸念の特徴や関連要因の検討，そして，総括の 4 つのパートで構成されている。

第 1 章では先行研究のレビューを行った。第 1 章第 1 節ではボディイメージに関する先行研究を全般的にレビューし，醜形懸念研究がこれまでのボディイメージ研究にどのように位置づけられるかの整理を行った。第 1 章第 2 節では醜形懸念に関連する先行研究のレビューを行い，本研究における研究課題として，醜形懸念の評価法の確立と醜形懸念の特徴や関連要因の検討を行うことの必要性について論じた。

第 2 章では，第 1 章で設定された問題意識に基づき，醜形懸念の評価法の確立について検討を行った。本章の目的は，醜形懸念のアセスメントツールとして，Littleton et al (2005) による Body Image Concern Inventory (BICI) の日本語版 (J-BICI) を作成することであった。第 2 章第 1 節では醜形懸念が高まる時期である青年期に相当する大学生を対象に，探索的因子分析による J-BICI の因子構造の検討を行った。その結果，先行研究とは異なり，J-BICI は独自の 3 因子構造を有することが確認された。第 2 章第 2 節では，この結果を確認するために新たに調査対象者を追加し，J-BICI の 3 因子構造について，確証的因子分析による検討を行った。その結果，この 3 因子構造が先行研究で確認されている 2 因子モデルや 1 因子モデルよりも良好な適合度指標を示すことが確認された。これらの結果に基づき，第 2 章第 3 節では J-BICI の信頼性および妥当性の検証を行った。その結果，J-BICI は信頼性および妥当性のいずれにおいても十分であり，心理測定学的に不備の無いことが確認された。第 2 章第 4 節では調査対象を一般地域住民に拡大し，J-BICI の 3 因子モデルの検証を行った。更に，同サンプルを用い，J-BICI のカットオフポイントについても暫定的に検討を行った。その結果，3 因子モデルが男女を問わず有用であること，および，J-BICI の合計得点が 72 点以上である場合に BDD 臨床群に該当する危険性があることが明らかとなった。以上の結果から，J-BICI が研究および臨床においても有用なツールである可能性が示唆された。

第 3 章では醜形懸念の特徴について検討することが目的であった。第 3 章第 1 節では醜形懸念の性差について検討を行った。その結果，醜形懸念は男性よりも女性において高い傾向にあることが

明らかとなった。第 3 章第 2 節では，生涯発達的な視点から醜形懸念の検討を行った。その結果，男女ともに醜形懸念は 20 代がピークであること，加齢に伴い低下していくことが明らかとなった。

第 3 章において，若年層において醜形懸念が高いという結果が得られたことから，第 4 章では大学生を対象に，醜形懸念の関連要因の検討を行うことを目的とした。第 4 章第 1 節では，醜形懸念に関連する不安や心配の対象となりやすい身体部位や身体特徴の検討を行った。その結果，男女間で身体部位や身体特徴ごとに不満足感に差異が認められた。更に，男性では鼻，顔の輪郭，頬，額といった顔周りへの不満足感が醜形懸念と関連している可能性が示唆された。一方, 女性では体格，腹部，臀部，腕，体重といった体型やプロポーションに関連する身体部位や身体特徴への不満足感が醜形懸念と関連している可能性が推察された。第 4 章第 2 節では, 醜形懸念, アレキシサイミア, ネガティブ感情の関連について検討した。相関分析の結果，ネガティブ感情を統制した上でも，醜形懸念の下位因子はいずれもアレキシサイミアの下位因子である感情同定困難 (DIF) 因子と有意な正の相関を示した。重回帰分析の結果，DIF 因子のみが醜形懸念のいずれの下位因子とも有意な正の関連を示したことから，アレキシサイミアの特徴のうち，感情同定困難が醜形懸念に関連していることが推察された。第 4 章第 3 節では，醜形懸念と完全主義認知との関連について検討を行った。両者の間に関連が認められたことから，完全主義認知への介入を通じた醜形懸念の改善可能性について考察が行われた。第 4 章第 4 節では，自己注目に着目した醜形懸念の認知行動モデルの検証を行った。その結果，自己の容姿への注目をきっかけに容姿への否定的評価 (NE) が高まり，容姿の問題に対する安全確保行動 (SB) や容姿の問題からの回避行動 (AB) が惹起されるという仮説が支持された。また，これらの行動が，ネガティブ感情や自己の容姿への注目を再度高めてしまうという負のフィードバックループ・プロセスについても，一部支持する結果が得られた。第 4 章第 5 節では，高い醜形懸念を有する群における対人的な認知の検討を行った。高い醜形懸念を有する者は，男女ともに高い水準の他者からの否定的評価への恐れ（FNE），外的他者意識，社会規定的完全主義を示す傾向が認められた。女性においてのみ，高い醜形懸念を有する者は，内的他者意識も有意に高い水準の得点を示した。

第 5 章では本研究の総括を行った。第 5 章第 1 節では本研究で作成された J-BICI の利点と限界について言及を行った。第 5 章第 2 節では，第 3 章および第 4 章で得られた知見を基に，醜形懸念の支援に向けた包括的な段階的アプローチの提案が行われた。第 5 章第 3 節では研究の方法論および醜形懸念の構成概念の視点から, 本研究の限界を整理し, 今後の研究に向けた課題の提示を行った。